

---

# 決意の十三日、決行の十四日

村田やく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

決意の十三日、決行の十四日

### 【Zコード】

N1514G

### 【作者名】

村田やく

### 【あらすじ】

バレンタインデーの前日、好きな人の家族が亡くなつたことを知つた。

高校一年の一月十三日、わたしは、好きな人の母親が亡くなつたことを知つた。

「うへ……、うへ……」

「どうしようつて、あんたはどうしたいのよ。渡したいんじゃなかつたの?」

「う、う、う……、うだけど……」

電話越しに、わたしの涙声に少しいらついたような親友の裕子ちゃんの返答をうけて、わたしは更に泣きそうになつてしまつた。でも、相談に乗つてもらつているのはわたしなので、文句は言えない。わたしの好きな人は、ずっと母親との一人暮らしで、お互いをすごく大事にしていて、親子愛、という言葉がとてもよく似合つてゐる家族だった。その母親が死んでしまつたのだ。今日、学校で会つた彼の塞ぎようは、とても見ていられないほどだつた。

バレンタインデーということで彼にアタックしようとしていたわたしは、出鼻をくじかれてしまつたわけだ。

「とてもじゃないけど、こんな時に渡せないよ……、不謹慎だよう

……」

彼はきつと、色恋沙汰にうつつをぬかすよつな気分じゃない。わたくしなんかがチョコレートを持って行つたつて、迷惑に違いないのだ。

「……はあ。んで、あんたは今なにしているのよ?」

「チョコ、つくつてるけど……」

受話器の向こうで、盛大に転んだような音がした。

「なによ……、渡す気満々なんじゃない。なんで電話してくれのよ? で、でもこれは、なにかしてないと落ち着かないからで、別に渡すためのものじゃ……」

「……じゃん渡せば。お菓子は得意でしょ？」

「うう、……、そのはずなんだけど……」

さつきから失敗ばかりなのだ。何度もやつても焦がしてしまつ。どうしてかといふと、湯せんにかけるのではなく、何故かフライパンにチョコレートを乗せていたのだ。それも、何度も。

やつぱり、渡すなつて、神様がいつているのだろうか。

「失敗？ そんなのつくり直せばいいじゃん。材料は？ まだある？」

「…………あるけど」

無駄に、たくさん買つてしまつたのだ。

「がんばりなさい、応援してるから。もう切るよ？」

「ちよ、ちよっと待つてよ！」

そういう問題じやない。こんな、彼の身内が亡くなつた時に色事を持ち込む、ということが問題なのだ。応援なんてされても、どうしたらいいのかわからない。

「……あのねえ、あいつが、迷惑だなんて思うわけないでしょ？ 人がいいのだけが、取り柄みみたいなやつだよ？」

「そ、それだけじゃないよう！」

そう、それだけじやない。わたしは、彼のいいところをいっぱい知つている。

「…………」

「そ、それに……」

迷惑じやない、それだけの理由で受け取つてもらつても、嬉しくなんかない。

「……まあ、確かにあんたの性格じやあ難しいわね」

「だから」「…………」

「あのねえ」

裕子ちゃんの声が低くなつた。ちよつと怖い。

「こんな時だからこそ、なのよ」

「……は？」

なにを、いつてるんだろうか。

「彼、すごく落ち込んでるんでしょう？ 大切な母親が死んだんだから、当然よね。彼は、甘えられる人を失ったのよ、たつた一人の家族を。だったら、その代り、といつちゃなんだけど、その穴を埋めてあげられるのは誰？ どんな人？ 恋人だったらできるんじゃないの？ でも、今彼にはその恋人がない。あなたのリサーチが正しければね」

うん、リサーチには自信ある。頑張ったし。彼には、そういういた類の人はいないはずだ。だからこそアタックしようと思つたわけだけど……。

「でもでも、わ、わたしに、彼が甘えてくれるとは」「とても思えないなあ……。

「まあ、あんたはどつちかといつと、可愛がられるタイプだからねえ。でも、それでも、恋人には甘えたくなるもんなのよ。相手がたとえ、どんなちんちくりんだろうとね」

ちんちくりんというのが、ちょっと引っかかるけど……。

「……ほんと？」

「……たぶん」

「そうだよね。裕子ちゃんも彼氏いたことないから、体験談なんてあるわけないし。本当に信用していいんだろうか。でも……。

「だ、だーいじょうぶだつて！ あたしを信用しなさいって！ 彼には、優しさの塊みたいなあんたが、必要なんだつて！」

大親友がここまでいうんだから、信じてみてもいいかな、とも思う。

「……じゃあ、頑張つてみようかな。信用するよ？」

「……玉砕しても怒らないでよ？」

「あたりまえだよー。振られたことを人のせいにする気はないよ？」わたしがそう答えると、受話器から、あはは、と安心したような笑い声が聞こえた。

「まあ、頑張りなさいな。うまくいくことを祈ってるわよ」

「うん、ありがとう裕子ちゃん。頑張るね」

そういうて電話を切らうとしたのだけれど、

「あ、そうそう」「う

と、引き止められてしまった。

「なに?」

「思いつきつ甘くしなさい」

「え?」

「チョコは、思いつきつ甘くしなさい。悲しい時や疲れてるとときは、甘いものを食べると元気でるものよ。インパクトもあるしね。それだけ。じゃね」

そういう残して、電話は切れた。

裕子ちゃんとは随分と話し込んでいたりしく、時計をみると、日付ももうすぐ変わろうか、といつ時間になっていた。あと少しで、バレンタインデーその日だ。

わたしはふうと息をついて、再びチョコレートと向かい合った。

「甘く……

信用するよ? 裕子ちゃん。

朝から、心臓が早鐘を打つている。すごい勢いで送り出された血液が体中を駆け巡り、それが熱くてたまらない。くらくらする。恥ずかしさを堪え、彼を呼び出して待つ間、不安と興奮で頭の中がぐるぐると回っていた。

ふと空を見上げる。抜けのよつな青が、広がっていた。

雲ひとつない。きっとわたしを応援してくれているんだ。そうこきまつてる。

深呼吸を繰り返す。こんなことで緊張を和らげられるなんて、誰がいったんだろう。ちっとも役に立ちやしない。掌に「の」の字を書いて飲み込むなんて、もってのほかだ。試しておいてなんだけど。

それでも深呼吸を繰り返す。胸に手を当て、大きく息を吸い、少しどめて、それから吐き出す。藁にもすがる思いといふのは、いついたものを「うのうづ」だ。

こんな状態で、「うまく告白なんてできるのだうづか？」落ち込んでる彼にも、気を使わなくちゃいけないのに。

土を踏む音が聞こえてきた。

わたしのいる校舎裏は、たぶん告白の定番スポットだ。それに、今日はバレンタインデー。ひょっとしたら、彼は、私の用事が何なのか、感じているのかもしれない。足音に、少しだけ戸惑うような気配を感じた。

……怯むな、わたし。

それからすぐに、彼は姿を現した。いつもより元気のない顔を、少しだけ赤くして。

わたしは、彼に話しかけようとした。でも、押し出そうとした息が、喉につかえてしまつた。やっぱり、深呼吸は役に立たなかつたみたい。

声が出ない。想いを伝えられない。

嫌だ。そんなの嫌だ。

気がついたら、両手に持つたチョコレートの箱を、彼に向つて、思いつきり突き出していた。

「…………あ

しまつた。もつと手順を踏む予定だったのに……。

しかし彼はふわりと笑つて、箱を取り、

「ありがとう」

と。そういった。

食べていいいかな、と訊かれ、わたしは慌てて、ぶんぶんと頷いた。彼の、男の子にしては細くて白い指が、粉の付いた生チョコレートを一粒つまみ、その口へと運んで行つた。

そして。

「…………ああ、甘い」

そういうて、彼は笑いながら一筋、涙を流した。  
どうやら、少し甘くじすぎたみたいだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1514g/>

決意の十三日、決行の十四日

2010年10月8日15時58分発行